大庭みな子における〝野草〟の魂

――〝火草〟及び魯迅を介して

江種満子

一　はじめに――みな子の遺書

二〇〇七年五月二四日に大庭みな子が病没してまもなく、夫の大庭利雄はみな子の遺品を整理するうち、はからずも、みな子が健在だった時に書いた二通の遺書を見つけ、「不可解なみな子の遺書」と題した一文を『群像』(2007・11) に寄せた。

二通の遺書は、どちらもみな子が作家として円熟期を迎えた中で書かれており、和紙の巻紙に毛筆で記された内容も基本的にほぼ同じであった。一通は貸金庫にあり、他の一通は「遺書」と書いた封筒に収められ、封筒にも文面にも同じ日付が明記されて自宅のみな子の箪笥に入れられていたという。

利雄によって紹介された遺書は短文なので以下に全文を紹介するが、はじめてこれを読んだとき私は、いままで思い描いてきた大庭文学の個性がここに端的に現われていると感じ、東洋的な見方によれば、人生の結語としてこれほど単純明快な言葉はないかもしれないとも思った。けれども、大庭みな子が遺書に書いているような死生観に行き着くまでには、そもそもの発端があり、紆余曲折が踏まれていたはずである。

＊

『群像』誌上に紹介された二通の遺書を、改行、句読点ともに掲載されたままに転記する。

貸金庫の中にあった方は、

この世に生き長らえることで死を深めたくありません
命を断つことで永遠に生きることにしました
今後は新しい芽の中に生き続けます
死後三十年を経て発表することを明記した以外の原稿は焼き捨てること
葬儀、墓は不用。
骨は機会があればシトカの海に撒いてください

自宅で見つかった方は、

大庭みな子　押印

この世に生き長らえることで死を深めたくありません。命を断ち新しい芽の中にかたちなく生き続けることにします。
死後の原稿の発表は一切しないこと。葬儀、供物、墓は不要。
骨はシトカの海に機会があったら撒いて下さい。
文芸家協会に百万円寄付すること。

千九百八十六年十二月十二日　　大庭　みな子

どちらの文面にも、平穏な日常の生命に執着するだけの生き方をよしとせず、個としての生命を自ら断つことによって他の「新しい芽」に繋ぎ、永遠の生命の流れに合一したい、という意志的な思念が示されている。それゆえにシトカ（アラスカ）の海へ散骨してもらいたいとの願いである。

このような凝縮されたメッセージを前にしながら、二つの遺書の微妙な違いなどにふれるのは些事にすぎないが、自宅にあったものの方が表現に彫拓が加えられている印象がある。貸金庫の文は「永遠に生きる」、「新しい芽の中に生き続け」ると、二行にわたってやや重複気味になっているところを、自宅のものの方は、この趣旨を一行に絞って過不足がない。このことは二つが執筆された順序に関係しているかもしれない。

それはさておき、大庭利雄は、一九八六年一二月という遺書の執筆時からはるか二〇年以上もたって、二〇〇七年の没後に見出された遺書について、「新しい芽」となって「永遠に生きる」という表現を手がかりに回想している。武蔵野にあった津田塾女子大学に在学中から牧野植物図鑑を携えて、折々に林を歩いたみな子は、ユズリハが葉を新旧交代させる仕組みを好み、よく利雄に話したという。その記憶から、ユズリハの葉のように現在の葉が次の葉へと絶えることなく交替して命を伝えていく、そんな自然の摂理に自身の生命をなぞらえているのであろう、という意味のことを言っている。

つづいて、みな子のこのような生命観＝死生観の始まりについて述べている。少し年譜事項を補いながら、その趣旨を紹介してみるなら、以下のようであろうか。

利雄は一九四八年に、大学入学間もない椎名美奈子と知り合い、それから夥しい数の書簡を交換した七年間の交際をへて、その間、みな子の卒業後などは遠距離も厭わず新潟の住まいまで訪ね、ようやく結婚にいたった。二〇〇九年に刊行が始まった日本経済新聞社版新全集第

一回配本の第25巻（注1）は、二人が交換した書簡集（全九五三通）に当てられている。このうちの結婚までを読むかぎり、みな子は他の男性に思いを残していたり、創作に行き詰まって鬱状態に近かったり、ときに死を匂わせたりしているが、その都度利雄は励まし役に徹していたように見える。結婚・妊娠・出産をへて、アラスカに家族ぐるみで移住して一一年間暮らし、みな子の念願がかない作家の地位を得て帰国するまでの間、もちろんその後の日本での生活も含めて、ずっと利雄はみな子の作家志望期から作家期までを支援した。

そんな利雄がみな子の死生観をめぐって行き着くのは、やはりみな子のヒロシマ体験だった。ヒロシマ体験を作家となってはじめて文壇に発表したエッセイ「地獄の配膳」（1972・5）によれば、一四歳の女学生だった夏、みな子は原爆投下直後のヒロシマへ二週間、被災者の救援活動のために学徒動員されている。被爆して壊れた小学校の教室に数百人の被災者が収容され、医療の手だてもないまま死を待つだけのように横たわる場所へ、炊事と配膳の係として泊り込む。そこで目にした被爆者の末期の情景は、みな子に生涯消えない「トラウマ」を残したと利雄は言う。それが、人間も植物も等しく死すべき生命体として連続していると考えるような遺書の言葉を生んだ、と利雄は述べる。

みな子と豊富な対話を交わした夫ならではの洞察に、一読者の私は頷くばかりである。だが、「新しい芽の中にかたちなく生き続ける」という遺書の言葉を読んだとき、私がまっさきに思い浮かべたのは、アラスカの代表的な野草の「火草　fireweed」についてみな子が書いた初期の文章だった。またその火草にちなんだ短編小説「火草」（1969・1）だった。

いま、講談社版全集の「主要著作年表」（注2）を開いてみると、遺書の執筆より少し前に、小説「寂兮寥兮（かたちもなく）」（1982・5）や『楊梅洞物語』の中の「芽」（同・6）と題した章が目にとまる。遺書の中には「かたちなく」という言葉もあって、すぐに小説「寂兮寥兮」を想起したが、それ以上に紅い火草の鮮やかな彩りの方に心を奪われた。そして、みな子の愛したアラスカの野草の火草に誘われるようにして、第一エッセイ集『野草の夢』（1972）や、魯迅の散文詩集『野草』（1927）につながり、もう一つ、ブルガリア出身の比較文学研究者デンニッツァ・カブラコヴァが東京大学比較文学研究科で二〇〇六年に学位を取得した論文『文明と希望　近代日本における「雑草研究」』が続いた。カブラコヴァは二〇〇七年の初めに病床のみな子にその一冊を献呈し、それを読む機会を私は

利雄氏から与えられていた。

このように、遺書の中の特徴的な言葉のまわりには、夫の利雄の発言に私自身の記憶も重なり、ヒロシマ体験、ユズリハの生態、みな子自身にとっての典型的な野草である火草、そして小説「火草」、魯迅の『野草』、さらにはみな子の「野草」表象をめぐる異文化圏出身者の研究などなどが、いま私の中でひしめいている。これらの間に、大庭みな子が、自分の人生を生命の「芽」と感じ、永遠の命の連鎖に合流することを信じた想念の、その生成と展開について、私なりのストーリーを描いてみることができればと思う。

二　アラスカの火草と小説「火草」

大庭みな子のことを考えるとき、私はアラスカの火草を語ったみな子の次の一文をよく引用してきた（注3）。今回もそうしたい。

> 火草、ファイアウィードは、アラスカに一番よく見られる花で、地域によって数種あり、八フィートもあるかなり丈の高いもの、地を這うように低いものもあります。四片の薄い紅の花びらが可憐で、長い柄のまわりに下の方から次第に花をつけ、見渡す限り密生してそよいでいるさまは、原を這う炎を思わせます。乾燥した季節に、この地方によくおこる山火事のあとに最初に生える植物がこの火草です。
>
> （「火草とエスキモーたち」
> 1970・2『婦人公論』、『魚の泪』1971所収）

紅い花を咲かせ、地を這うように低いのもあるという火のような草、ファイアウィードを、日本では「火草」と呼ばない。「やなぎらん」という。みな子は英語のfireweedから直訳して独自に名づけた。彼女には、この花は「やなぎらん」ではなく、旺盛な生命力に相応しい名で、英語流に「火草」と呼ばれなければならなかった。

ちなみに、中国からの留学生に、fireweedの中国名を中国の英語の辞書は何と訳しているか調べてもらったところ、簡便な英語辞書には「雑草」と書いてある、との報告だった。固有名のない普通名詞だけの回答に一瞬唖然としたが、存在はしているけれども名で呼ぶほどの花として認知されていないただの「雑草」らしいとわかり、それはそれでおもしろかった。次に日本人の中国研究者に訊ねると、日本と同じく「やなぎらん―柳蘭」という固有名であると、カラー写真付きで教えられた。それからしばらくして北京大学で大庭みな子の小説「火草」について話す機会があり、ここでも会場に花の写真を添え

て質問してみたが、どなたも見たことがないという反応だった。かくいう私も、大庭みな子を読むまではこの花を知らなくて、その花に会うためにアラスカまで出かけたくらいである。けれども日本でも諸処に群生する場所があることを、いまでは承知しており、見たこともある。

さて大庭みな子が一九六八年に日本の文学界に登場して次々に発表した当初の作品は、アラスカ時代にストックされていた原稿によったが、一九六九年一月に発表した短編小説「火草」もその一つだった（注4）。小説のタイトルも主人公の名前も「火草」とするほど、みな子のこの野草への思い入れは深く、小説では、火草と名づけられたアラスカ先住民の娘が、火草の咲き乱れる季節に火草のような野性的な恋をして、一族によって抹殺されるまでの顛末が語られる。

アラスカの先住民の一部族が、大航海時代の幕を開けたヨーッロッパの「白い人」たちの接近によって〈近代〉と出会い、部族内には波が立ちはじめる。その部族の中に、生来野性的な生命力に富み、それゆえに部族の掟を逸脱してやまない火草という娘がいる。彼女は年老いた族長の愛人の座に満たされず、次期族長と目されている有望な若者を愛し、その子を妊娠している。胎児とともに部族から脱出して新しい家族を創始しようと、さかんに若者をそそのかしているが、若者は、「白い人」のもつ狩猟のノウハウもたやすくものにできる卓越した狩人であり、火草と脱出する新生活に魅力を感じつつも、火草とのことは秘密にしたままで次期族長の座が回ってくるのを黙って待つべきかと、大いに迷っている。

ある朝、若者はいよいよ老いた族長との対決を避けられない事態を迎える。

老若の男同士の対決は、山に登る道々、まずは狡猾ともいうべき緊迫した言葉の鞘当てによってくり広げられる。老いた族長は部族のためには若者を手放すべきではないと考えたすえ、火草を奪った若者を憎むよりも、自分を裏ぎった若い愛人を消すことによって決着をつけることを、最終的に選ぶ。そして、心臓を停止させる毒草のジギタリス（狐の手袋）と思われる葉をそれとなく採取し、食事の時、野草好きの火草に食べさせて目的を達する。野生の娘は皮肉にも野生の毒草によって制された。火草の弔いの間中、若い恋人は沈黙をまもったままだが、次期族長の座は暗黙のうちに約束されている。

組織の転換期において、個人の野性的な生命力を押しきろうとした女は、組織を守ることを第一義とする者たちによって隠微に抹殺され、組織は何事もなかったかのように鎮まる。この小説の先住民たちは母系制をとる部

族とされるものの、母系制は決して母権制のことではなく、真相は男が権力を握る父権制である。すなわち、いったん部族が危機に出会うや、女を抹殺することによって組織は維持され、当の女・火草以外は、男も女も組織を維持するために共謀する。いみじくも、部族の危機において、女というジェンダーがどのように扱われるかを、テクストは男たちの劇的な駆け引きの刻々を通して語る。

小説「火草」は、男女の恋を、火草の開花や鮭の産卵やオーロラの出現など自然のサイクルがもたらすさまざまな現象の中へ混融させて描き、それと対照的に、組織内の権力がどのように争われ、どのようにして女というジェンダーを権力闘争の決着策として利用するか、その経緯をドラマティックな心理劇として巧みに表現する。その技倆だけでも、この短編は日本の現代文学の卓越した達成としてもっと評価されてよい。

しかしながら、小説「火草」をこのように解読しただけでは、じつは一面を読んだに止まる。注意すべきは、組織を維持するために権力者たちがいかに女性の反逆者を消そうとも、人間本来の生命の粘弾性は、抹殺しても抹殺しても再生し、反逆をやめないということを、火草を毒殺した老族長自身が熟知している、そのように小説のテクストが語っていることだ。族長みずから、生まれついて強い生命力を秘めた若い愛人の死を心のうちでは深く悼み、愛人の火草は「山火事の焼け跡に一面に咲く火草のような女だった」といとおしみながら、火草の「一本を手折ることはできても、根絶やしにするなどということはできない」とひそかに思うのだ。この老族長の思いは小説の中では誰の耳にも伝わらないが、読者の耳にはしっかり届く。たとえ第一の火草が消えても、第二第三の火草が必ず現われ、組織や制度は、これを守り維持する力と、そこからはみだす力とが拮抗する関係を再生させてやまない。読者は耳を澄ませば、テクストに内在するこうしたメッセージを聞くことができる。

さらに、作者大庭みな子がそのような透徹した目で組織の論理を見抜き、自然の生命力が本来もつ粘弾性が絶えることなく組織を揺さぶり動かす、という逞しい信念を抱いたのは、アラスカ移住後のことである。すでにアメリカ文化圏そのものであったアラスカは、女性にも男性同様の個性的な言葉を求める場所だった。その中で、日本にいた頃のみな子の鬱状態は払拭され、野草の火草の生命力に感染したかのように自身の生命力を解き放った。

そうしてみると、小説「火草」に批判的に描かれてい

る先住民の父権的な権力構造や、その基底にあって女性を組織維持のための緩衝体とみなすようなジェンダーの仕組みは、一九五九年にみな子が、私を認めない日本なら（注5）、とアメリカへの脱出を果したときに見棄ててきた日本の社会構造でもあった。そうだとしたら組織のはみ出し者だった火草の反逆性と生命力を身に帯びて、大庭みな子は日本の文学界に還ってきたのである。

三　「野草の夢」と「地獄の配膳」
——魯迅の『野草』の力

小説「火草」の発表と前後しつつ書いたエッセイが、エッセイ集の最初となる「野草の夢」として出版されたのは、一九七二年八月である。作家や画家の表現法にふれたものを中心にこの一冊にまとめ、ほぼ同じ時期の他のエッセイは第二エッセイ集『醒めて見る夢』（1978・1）に収められ、両者は姉妹篇の関係にある。

一冊となって世に出た『野草の夢』にはいくつかの特徴がある、まず、編集のうえで意図的な構成をおこなっている点だ。発表順の配列をとらず、巻頭に「野草の夢」（1972・1）一篇を置き、なおこれを一冊の表題とし、さらに、「野草の夢」の後に、発表時期もまた「野草の夢」につづいていた「地獄の配膳」（1971・5）を置いている。他はおおむね類纂である。

おそらく、エッセイを一冊にまとめる企画は、一篇の「野草の夢」を発表した一九七二年一月あたりに持ち上がったのではないだろうか。その「野草の夢」は、所収作全二〇篇のうち第一三番目と遅い順で発表されたにもかかわらず、それを一冊の冒頭に位置づけて総タイトルにまで押し上げていることが、そのような想像を誘う。

さて、一篇の題も一冊の表題も、見ただけで魯迅の散文詩集『野草』との関係が容易に想像されるが、内容面でも魯迅への思いが熱烈に告白されている。それゆえに私は、大庭みな子は魯迅への傾倒を介してヒロシマ体験を「地獄の配膳」として公表する力を得たであろう、と考える。

これらのことはもう少し詳細に述べるべきである。「野草の夢」一篇は、前に言及したデンニッツァ・カブラコヴァの指摘をまつまでもなく、魯迅の『野草』の傘下にあり、しかも魯迅賛歌である。みな子は若い頃に愛読したヨーロッパの詩人たち、ボードレール、ヴァレリイ、T・S・エリオットなどへの傾倒をざっと紹介し、そのあと、自身が四十代にさしかかると、むしろ東洋の西行・芭蕉・魯迅に感動していると告白し、なかでも魯迅への大いなる共鳴を告白して文章を閉じている。日本ではこのころ

魯迅への関心は高まる一方だったが、エッセイは次のように締めくくられる。

最近、古い本箱の中からヴァレリイの文学論をとり出して読み、なかなかよいと思ったが、彼の詩はわたしの心を動かさなかった。そのあとで、同じ頃出遇った魯迅を読み直すと、あらためて激しくゆり動かされ、夜半に思い出して闇の中で再び泣いた。ああ、魯迅の野草になれたなら、わたしは倖せである。

（傍線江種、以下同じ）

魯迅を読んで涙するみな子が、「魯迅の野草になれたなら」と願っているように、ここでの魯迅はもちろん『野草』の魯迅である。さらにみな子の文脈から絞っていくと、直接的には『野草』冒頭の「秋夜」一篇を指し、とりわけそこに登場する名もない野草に焦点が定められているとみてよい。みな子が読んだのは竹内好の初訳（注6）であり、その「秋夜」には野草がこう書かれている。

それらの草花が、ほんとは何という名であるか、人々が何という名で呼ぶか、私は知らない。私の覚えているのは、そのひとつが、ごく小さな桃色の花を着けたことだ。今でもまだ着けているが、もっと小さくなった。彼女は、冷い夜気のなかで、身をすくめて夢をみる。春の来るのを夢み、秋の来るのを夢みる。痩せた詩人が涙を彼女の最後の花びらにすりつけ、たとい秋が来ても、たとい冬が来ても、そのあとにはかならず春が来、胡蝶がみだれ飛び、蜜蜂は春の歌をうたうと彼女に告げたと夢みる。そこで彼女はほほえむ。その色は凍えて痛ましく赤み、なおも身をすくめたままではあるが。

（「秋夜」竹内好の初訳 1953 による）

「秋夜」の詩中の「私」は、二本の大きな棗の木を枝に沿って見上げ、葉を落とした枝が夜空の奥にまたたく星たちを刺すかのように伸びていく高みに至り、やがて視線を地面へと下ろし、夜の空から降り注ぐ露を受けていまも裏庭の地面を這っているであろう野草のことを思う。いまでも小さな桃色の花を咲かせているだろうと。そして「私」は、痩せた詩人がその野草の花に向って厳しい冬の後には春が来るよと涙をこすりつけるようにして希望の言葉を語りかけたと、そう花は夢みてほほえんだ、と想像する。（なんと魯迅の表現の主語はややこしく入り組んでいることか。）

みな子が「魯迅の野草になれたなら」と言うとき、その野草とはこの小さな桃色の花をもつ野草にちがいない。しかも私には、この花がアラスカの火草の姿にかぎりなく重なってみえる。みな子は自身をその紅い小さな花に擬し、その花のように「詩人」＝「私」＝魯迅から、涙とともに「春が来」ると希望をささやきかけられたように感じて、「泣いた」のだ。(注7)

周知のように、魯迅は『野草』の全作を逐次発表し終えたあとで、出版に臨んで「題辞」を付した。「題辞」の趣意は、野草たちの完璧な死＝腐朽が力ある生命の再生を約束すると、暗示するところにある。当時の中国の人間・政治・社会に深く失望していた魯迅は、しかしその深い絶望こそが逆説的に、変革への信頼できる希望を生みだすと考え、そのことを屈折した文体で、たとえば『野草』の中の「希望」一篇に典型的にみられるように、「絶望の虚妄なることは、まさに希望と相同じい。」などと、ひたすらアイロニカルに、ニヒリスティックに語った。

そして「題辞」の結語を「去れ、野草、わが題辞とともに。」と締めくくり、それを最初に受ける位置に「秋夜」を置いた。

このような『野草』の構成は、魯迅を愛したみな子が「野草の夢」一篇を書いたとき明らかに念頭にあり、アンソロジーの『野草の夢』を仕立てるときにはなおのこと自覚していただろう。惜しみなく魯迅敬愛を語った「野草の夢」一篇に、総タイトルとしての役割に加えて、『野草』の「題辞」の役割も課し、「去れ、野草、わが題辞とともに。」とばかり、集中の各篇に号令をかけさせる趣向をとって、最初の号令で招来したのが「地獄の配膳」だった。

「地獄の配膳」についてはすでにふれたので、以下少しの補足にとどめる。一九四五年八月六日に広島の原子爆弾で壊された小学校に収容された患者のために、敗戦が決まった後のヒロシマに救援隊として近郊の女学生たちが学徒動員された。そこで少女たちはこの世ながらの人間地獄を目にした。

みな子は魯迅から感得した希望の力に押され、女学生時代のこの暗い体験を、おもむろに掘り起こす。女学生たちは教室の一つに雑魚寝をし、毎日三回、校庭に据えられた風呂桶のような大鉄鍋で雑炊を炊き、バケツに入れて患者たちに柄杓で一杯ずつ配る仕事を命じられるが、けれども患者の求めに対しては何一つ応える術がない。米をとぐ水道は瓦礫の中に流れっぱなしで、そのまわりには一面白骨が散らばっている。校庭の隅には死体を焼く大きな穴が掘られ、絶え間なく煙が上がっている。このような場に、これから人生を始める少女たちが置か

れたという歴史の事実を、「地獄の配膳」によって甦らせる。

じつは、新版『全集』第23巻（注8）には、これまで存在が知られておらず、つい最近見出された未発表作「痣」（注9）が収められている。もとは津田塾女子大学の同人誌に発表された短編である。大学生のみな子は、救援体験を書くことが、ヒロシマにかかわった人間の責務であるかのように、あるいは生き残った者に罪悪感があるかのようにこの習作を書いているが、そこには救援所の患者たちの言動や姿態をあえてリアルに描写する場面も含まれていた。しかしこの習作のあとみな子は、ヒロシマ体験を書く方法が見出せなかったことも理由の一つと思われるが、ヒロシマを書くことを封印していた。したがって習作「痣」の存在は利雄さえ知らなかった。

しかし「痣」が発見されてみると、「地獄の配膳」の中にはこの習作がリアリズム手法で描いた場面のいくつかが、そのまま取り込まれていることがわかる。このことは、「地獄の配膳」の公表によって、ヒロシマのトラウマの重い扉がわずかながら開かれたかのような印象である。思うに、みな子に扉を開かせたのは、暗闇の底から希望を語った魯迅の『野草』の力ではなかったろうか。みな子は、魯迅を念じて「野草の夢」一篇を書き、さらに魯迅によって希望の扉を開き、ヒロシマで「地獄の配膳」をした体験を書く力を得た。

とはいえ、「地獄の配膳」のどこに希望の気配があるのかと問う声もあるにちがいない。収容された患者が生き延びる可能性などどこにもなく、苦しみながらこと切れる場面ばかりがあって、介護する女学生たちは、戦争は終わったのに精神的な拷問にあっている。どこにも希望などありそうにない。

だがひるがえって、救いのない体験を、他者に向ってあえて言葉に表す行為には、たとえむごくて希望のない体験の描写であっても、それらが読者に受けとめられ、読者の心に痛みの共感を生みだす可能性が期待されているのではないか。語るという行為自体が希望の存在なくしては行われ得ないのではないか。

大庭みな子は、魯迅に感動して「野草の夢」一篇を書いたとき、ヒロシマの痣＝トラウマに再び言葉を与えることによってトラウマについて語る力を得た。魯迅はその時みな子のすぐ身近に感じられる心強い先達であった。（やがてみな子は、浦島草という仏焔苞をもつもう一つの野草を発見し、その野草の表象力を駆使して畢生の長編『浦島草』(1977) に挑戦する。少なくともその時には魯迅と肩を並べるだろう。）

けれども、すでに前章で述べてきたように、希望を夢見る魯迅の世界をみな子が受け容れるためには、それに先立つ前提として、みな子に小説「火草」を書かせたアラスカ（アメリカ）の異文化体験が、みな子の火草のような精神に点火することが必須だったことを、ここでもう一度確認しておきたい

四　結びに代えて　――カブラコヴァ『文明と希望　近代日本における「雑草研究」』など

カブラコヴァは、日本文学における「雑草研究」というテーマのもと、日本の近代文学研究者がこれまで思いつかなかった雑草・野草の表象の系譜を大がかりに探査し、日本の近代文学研究に豊かな成果をもたらした。

この論文をあえて単純化して紹介するなら、近代物質文明の直線的・戦闘的な展開に対し、それに抵抗するものとして雑草の表象を位置づける。北原白秋の雑草表象に始まり、与謝野晶子、前田夕暮、相馬御風をへて敗戦後は太宰治、福永武彦へ、さらに現代では野呂邦暢へ、最後に大庭みな子をとりあげる。論文が『文明と希望』と題されているように、これらの作家を論理的に配置するバックボーンとして、魯迅の『野草』の思想が据えられている。雑草は、文明によって決して「摘み取れない希望」の表象とされ、雑草は文明の中に「割り込む」、文明に抗して「生い茂る」、文明を超えて「生き延びる」ものとして、順々に論じられる。最終章に大庭みな子を置き、その大庭みな子を眺めるために主として『浦島草』を選択しているのは、至当である。

私見では、大庭みな子に文学の課題をもたらしたゆかりの地が三つある。すなわち被爆都市ヒロシマ、異文化生活を経験したアラスカ、小作争議史の最大の舞台で、みな子の郷里だった蒲原（新潟）だが、『浦島草』はこれら三つの場所を舞台に、日本の近代史が経験した戦いのすべてを蔽う世界を構想している。三つの場所がそれぞれに見せつけた近代文明の闘争を総合的に描くためには、近代の闇と夢を併せて表象できる浦島草という特異な野草の発見がなければならなかった。

『浦島草』は、東京の古い民家の裏庭に浦島草が咲く季節に始まり、最終章ではこの東京の住まいが取り壊されてコンクリートの駐車場に変じ、浦島草もコンクリートの下に消え、萎れかかったのがわずかに墓石の間に残っている、そんな風景で幕を閉じる。

小説「火草」では、火草は抹殺されても、第二、第三の火草の再生が予告され、けっして抹殺し尽くされはしなかった。『浦島草』の浦島草も、萎れかけているとは

いえ、抹殺し尽くされたわけではない。だが、生命の「芽」の再生は困難の度を増していることは否めない。

けれども近代社会がもたらしたいくつもの闇をくぐりぬけて、諸々の生命を未来につなごうとする人間の忍耐づよい生態を描く『浦島草』は、世界文学としても比類のない文学的挑戦である。

注

(1) 日本経済新聞社版『大庭みな子全集』は大庭利雄監修で刊行。2009・5・25～2011・4・25、全25巻。

(2) 講談社版『大庭みな子全集』は1990・11・26～1991・9・30の刊行、全10巻。第一〇巻は田邊園子編の著作年表を収める。

(3) 江種満子「『火草』の世界――ネイティブ・ジェンダー・セクシュアリティ」(江種『大庭みな子の世界 アラスカ・ヒロシマ・新潟』所収2001・10新曜社)ほか。

(4) 詩劇「火草」(『譚』3号1985・8)の「あとがき」に「アラスカにいた頃、その地の民話をもとにして「火草」という小説を書いた。」とある。

(5) 新鋭作家叢書『大庭みな子集』あとがき「H・Y・Gに捧ぐ」(河出書房新社、1972)には、「わたしを相手にしてくれない故郷ならとび出してやれ、という気分だった。」とある。

(6) 魯迅の「野草」については、戦前から今日まで幾種類もの日本語訳があるが、大庭みな子がどの訳者のどの版で読んだかについて、管見によるとだいたい次のようである。日本経済新聞社版全集第25巻の書簡では、一九五三年六月一二日と七月三日に、二人は「阿Q正伝」の読後感を伝え合っているが、最初に魯迅を読んで話題にしたのは、手紙の流れからみてみな子だったと思われる。次に魯迅が話題になるのは、同じ年の一一月二四日になってからの、利雄書簡である。ここには、『野草』の中の「希望」に出てくる「ペトフィ」(ペテーフィー)の言葉が引用されている。このとき『野草』が二人に読まれていることがわかる。訳者と出版社については、この時期の日本で魯迅を翻訳紹介したのは竹内好が中心だが、『野草』と『吶喊』を収めた『魯迅作品集』が筑摩書房から出版されたのが、この年、一九五三年五月である。大庭利雄氏によると、この筑摩書房版の竹内好初訳が出ると買って読まれたとのことである。しかし、竹内が一九七六年一〇月からその筑摩書房の『魯迅作品集』を全面改訳して『魯迅文集』を出すことになり、その第3巻の「月報」にみ

な子は「魯迅と」(1977・3) を書き、それ以後の文章では竹内の改訳から引用している。したがって、「野草の夢」(1971・1) を書いたときには、まだ改訳はなく、みな子は一九五三年の竹内の初訳で『野草』を読んだことになる。

(7) 中国文学研究者の秋吉収には『野草』をめぐる研究がいくつもあり、魯迅の『野草』が与謝野晶子やロシア文学、お膝元の若手中国の詩人、果てはペテーフィなど、国際的な詩の果実からどん欲に栄養を摂取している事実が明らかにされ、中でも、近代中国で異彩を放ったとされる詩人徐玉諾とのニアミスに近い関係を研究した成果は、スリリングだった。だが秋吉が、「魯迅の散文詩集『野草』は野草と命名されていながら、詩各篇のうちには具体的に野草を詠み込んだものは一篇もない。」(「魯迅の『野草』執筆と北京『晨報副刊』」、『中国文学論集』22、1993・12、p73) と述べている点は、この論文を読んだかぎりでは疑問が残る。たしかに野草は詩のタイトルにこそなっていないものの、『野草』冒頭の「秋夜」には名もない野草、可憐な花をつけた可憐な野草が重要な役割を果している。また「行人」の中でも少女は旅人に花を咲かせた野草があることを告げ、そこに読者の目を誘っている。そしてこれらの花こそが、『野草』全篇を通してひそやかな希望の表象となっているのではないか。

(8) 日本経済新聞社版全集23巻、2011・3・25

(9) 同人誌『創造』2号、1953、椎名美奈子名で発表。

(文教大学名誉教授)